「わが恩師」　村上栄教授と5訓

名誉教授　山本晋一郎

村上栄（1903－1987）は私にとっては岳父となるため，ここに取り上げるのは相応しくないと思われるが，その生き方を間近に見ることができ，私にとっては大きな影響を受けた人物であったため敢えて駄文を弄することをお許しいただきたい。

村上は岡山医大を昭和6年に卒業し川崎祐宣先生（1904－1995）とは同期であった。卒業と同時に細菌学教室の助手に採用された。当時鈴木教授は寄生虫学が専門で教室は総て寄生虫学に関する仕事であり，学位論文も「吸虫類の卵殻形成」であった。細菌学はもっぱら夜間に独学で勉強を開始し研究を進めていった。昭和10年には助教授に昇進したが日本は支那事変に突入していたため昭和14年から17年まで天津防疫処長としてコレラの予防等の仕事に従事した。昭和21年に鈴木教授が病死されたあと昭和24年に教授に就任した。昭和44年に定年退職後は46年から51年まで川崎医科大学の初代微生物学教室教授を歴任した。村上の人生にもっとも大きな影響を与えた人物が三木行治知事（1903－1964）であった。三木氏は岡山医大を昭和4年に卒業し，昭和6年に細菌学教室の専攻生として同じ時期に入局した。三木氏は昭和14年に厚生省に移り，のちに公衆衛生局長，昭和26年には岡山県知事に就任されたが村上がもっとも尊敬し，影響を受けた人物として終生親交を重ねた。

昭和30年六高出身の郭沫若氏が訪日中国学術文化代表団団長として来日し，岡山へ寄られ後楽園に二羽の鶴を贈られたことをきっかけに，翌昭和31年には岡山県訪中文化視察団が訪中した。**Figure 1** はその時の写真で前列中央の毛沢東の右隣が川崎先生，左端が村上である。

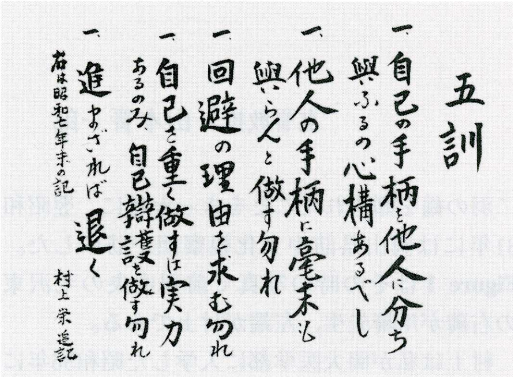
村上は私が岡大医学部に入学した昭和36年には，医学部長であったため入学式の後我々新入生の前で訓辞をしたこと，また3年生の細菌学の講義や実習で指導を受けた。穏やかで飄々とした温厚な学者とのイメージを抱いていた。その後不思議な縁で親子の関係となり，いつも三木知事や川崎先生のことなどよく話を聞く機会があった。

村上が細菌学教室に入局して2年目に心に期するところがあり，**Figure 2** のような5訓を自らの決意として記し，生涯守ったとのことである。私自身はこの中で4番目の項がもっとも心に残っているが怠け心に負けて，今もって，忙しかったからなどと自分に言い訳を続けている情けない状況である。村上からは生前「人よりちょっとだけ（100%とすれば120%か130%

Fig. 1

川崎医科大学
〒701-0192 倉敷市松島577
e-mail address：symt@med.kawasaki-m.ac.jp

Kawasaki Medical School：577 Matsushima, Kurashiki, Okayama, 701-0192 Japan


五訓

一、自己の手柄を他人に分ち
與ふるの心構あるべし

一、他人の手柄に毫末迄
與へらんと做す勿れ

一、回避の理由を求む勿れ

一、自己を重て做すは実力
あるのみ、自己辯護を做す勿れ

一、進まざれば退く

右は昭和七年末の記
村上栄追記

Fig. 2

くらい）努力をすること。努力を続けていればそのうち浮かぶ」との言葉をたびたび聞かされた。村上は現役時代には研究面では細菌学において生化学，酵素学，生理学，膜電位変化測定，電顕導入など伝研や大阪大学の理学部の専門家とも交流し，研究の幅を拡げ教授就任9年目に日本細菌学会総会を主催した。医学部長としては癌源研究施設の設置，基礎医学教室建設，清水記念体育館建設，医学部図書館建設などの事業に関与した。また，八木，赤木教授の岡大学長選挙では岡山大学人会との人脈などを通して役割を果たしていたようである。これらの事業は三木知事，川崎先生をはじめ多くの方々との親交を通してなしえたことにより実現できたと晩年語っていた。

蛇足であるが，人生の節目節目で多くの恩師からいただいたいろいろな言葉がある。拳々服膺を心掛けたいがまだ十分できていない。

小坂淳夫教授　「長い箸を上手に使いなさい」

小田琢三教授　「人真似の研究ではいけない」「学会発表する前に論文を完成しておきなさい」

平野　寛教授　「時間厳守」「上司を待たせるようでは駄目」および陸軍幼年学校仕込みの厳しい自己規制の姿勢

川崎祐宣先生　「堂々としていなさい」

勝村達喜学長　「サービス業では駄目です，自分のビジョンを持ち突き進みなさい」

柴田　進学長　「日曜日は休む日ではありません．人がいないので能率が上がります」